

不登校児童生徒の自己肯定感を高める工夫 ～感覚統合を取り入れた体験活動を通して～

那覇市立真嘉比小学校 教諭 嶺井 順子

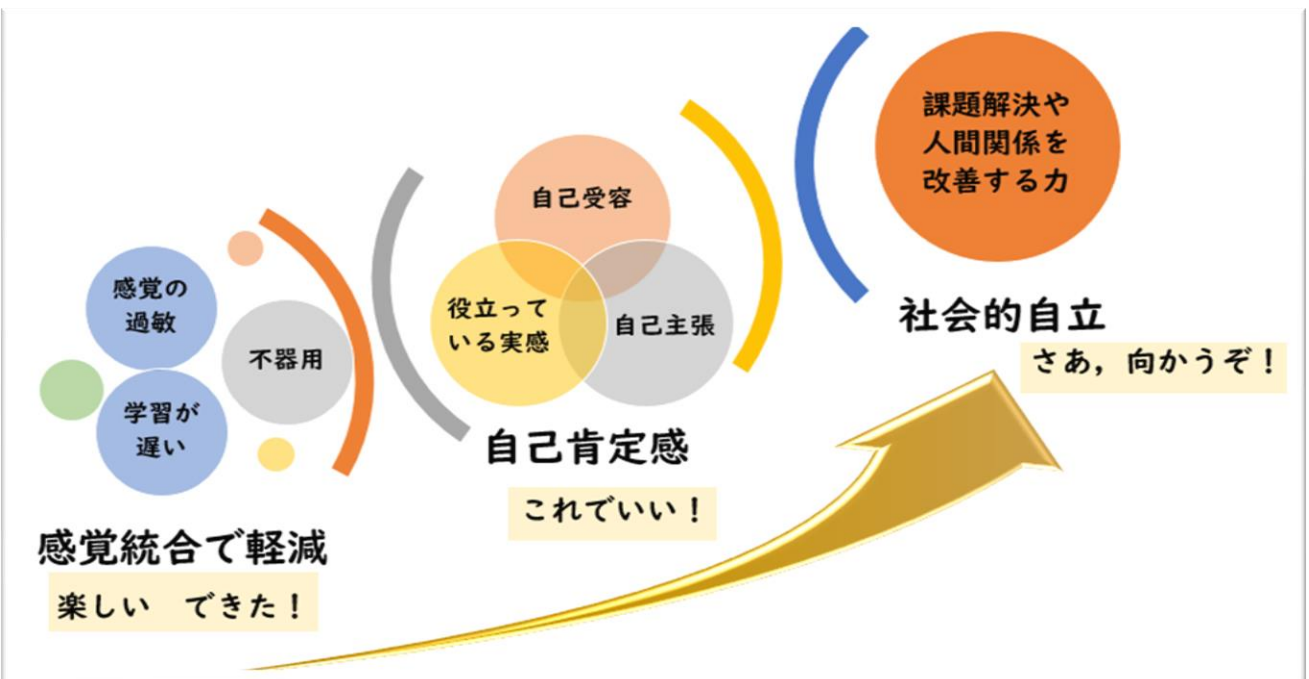
〈研究の概要〉

近年、学校教育の現場は不登校の増加、いじめ、児童虐待、貧困など児童生徒を取り巻く環境は厳しい状態にある。令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校児童生徒指導上の諸問題に関する調査結果によると、学校を30日以上欠席した児童生徒が全国で19万人を超え過去最多であり、前年度から8%も増加していることは喫緊の課題である。

平成29年2月13日フリースクール等に関する検討会議の報告からも「不登校児童生徒の中で、発達障害のある児童生徒が増えてきた」との指摘もある。発達障害のある児童生徒の中には感覚の過敏や不器用さが原因で叱られたり失敗ばかりすることを繰り返し、成功体験が少なく劣等感を持っていることも少なくない。一人一人の課題が解決すれば、できることが増え、褒められることが増えるなら自己肯定感は高まるのではないかと考えた。

子供達の抱える困難さは見た目ではわかりにくく、その軽減をめざすのが感覚統合であり、感覚を使ったり、感じたすることで感覚の情報が脳に伝わりやすくなる。この実践は児童生徒らのやりにくかったことができるようになり、自己肯定感が高まる工夫を探求し、児童生徒の社会的自立を目指す入り口となることを意図している。

〈研究のイメージ〉



目次

I	テーマ設定理由	81
II	研究目標	81
III	研究仮説	82
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	82
V	研究内容	82
	1 自己肯定感について	
	(1) 自己肯定感とは	
	(2) 自己肯定感の傾向を把握するために	
	(3) 自尊感情測定尺度(東京都版 平成 22 年)	
	2 感覚統合について	
	(1) 感覚統合で大事な 3 つの感覚と他感覚との関連	
	(2) 感覚統合の問題の分類	
VI	実践	86
	1 週時程	
	2 実態把握	
	3 実際の感覚遊び	
	(1) 聖徳太子ゲーム	
	(2) 色合わせゲーム	
	(3) ラダーを使ったジャンプ・ケンパー	
	(4) ブラックボックス	
VII	結果と考察	88
	1 作業仮説の検証	【結果】【考察】
VIII	成果と課題	90
	1 成果	
	2 課題	

不登校児童生徒の自己肯定感を高める工夫 ～感覚統合を取り入れた体験活動を通して～

那覇市立真嘉比小学校 教諭 嶺井 順子

I テーマ設定の理由

近年、学校教育の現場は不登校の増加、いじめ、児童虐待、貧困など児童生徒を取り巻く環境は厳しい状態にある。令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校児童生徒指導上の諸問題に関する調査結果によると、学校を30日以上欠席した児童生徒が全国で19万人を超え過去最多であり、前年度から8%も増加していることは喫緊の課題である。

平成29年2月13日フリースクール等に関する検討会議の報告によると、「不登校児童生徒の中で、発達障害のある児童生徒が増えてきた」との指摘もある。発達障害のある児童生徒は感覚の過敏や不器用さが原因で環境に馴染めない、じっとしてられない、学習についていけない等で叱られたり失敗ばかりすることをくり返し、成功体験が少なく劣等感を持っていることも少なくない。

今年度私が実践研究を行うあけもどろ学級の児童生徒は、長期にわたり不登校を経験しており、心理的、情緒的にも不安を抱えている。定期的な教育相談をはりゆん、学習支援をていんばうでも受けており、あけもどろ学級では体験活動を通して集団活動に参加をしている。このように組織的な支援体制の中で児童生徒は社会的自立に向けて歩めるよう個々に応じた支援を受けることができる。

児童生徒の個々の課題は様々で、はりゆんの教育相談からの申し送り以外にも実際に目にした児童生徒は不器用であったり、ぎこちない体の動きをするせいでボール運動が苦手だったり、漢字を書くのが苦手だったり、感覚の過敏さから大勢の中にいるのが騒音のように聞こえたりと、学校生活上起こりうる困難さが伺えた。

児童生徒が社会的自立に向かうためには自己肯定感が欠かせない。そこで個々の課題を抱えた不登校児童生徒の自己肯定感を高める基盤として感覚統合に着目した。感覚統合は米国の作業療法士であるA.J.エアーズ博士が考案したもので、子どもの学習が遅かったり、好ましくない行動をしたりする、見た目ではわからない子どもが感じる困り感の軽減を目指している。

そこで本研究では、感覚統合を取り入れた体験活動を計画し、継続して行うことで児童生徒に自己の課題を解決する力と成功体験が増えるようにし、それが自己肯定感の高まりにつながるような実践を研究する。自己肯定感が高まれば児童生徒らは課題解決や人間関係の改善を図る力が育まれ、社会的自立に向かうことができるだろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

感覚統合を取り入れた体験活動を計画し、継続して行うことで、児童生徒はできることが増え、自己肯定感が高まるような実践を研究する。

Ⅲ 研究仮説

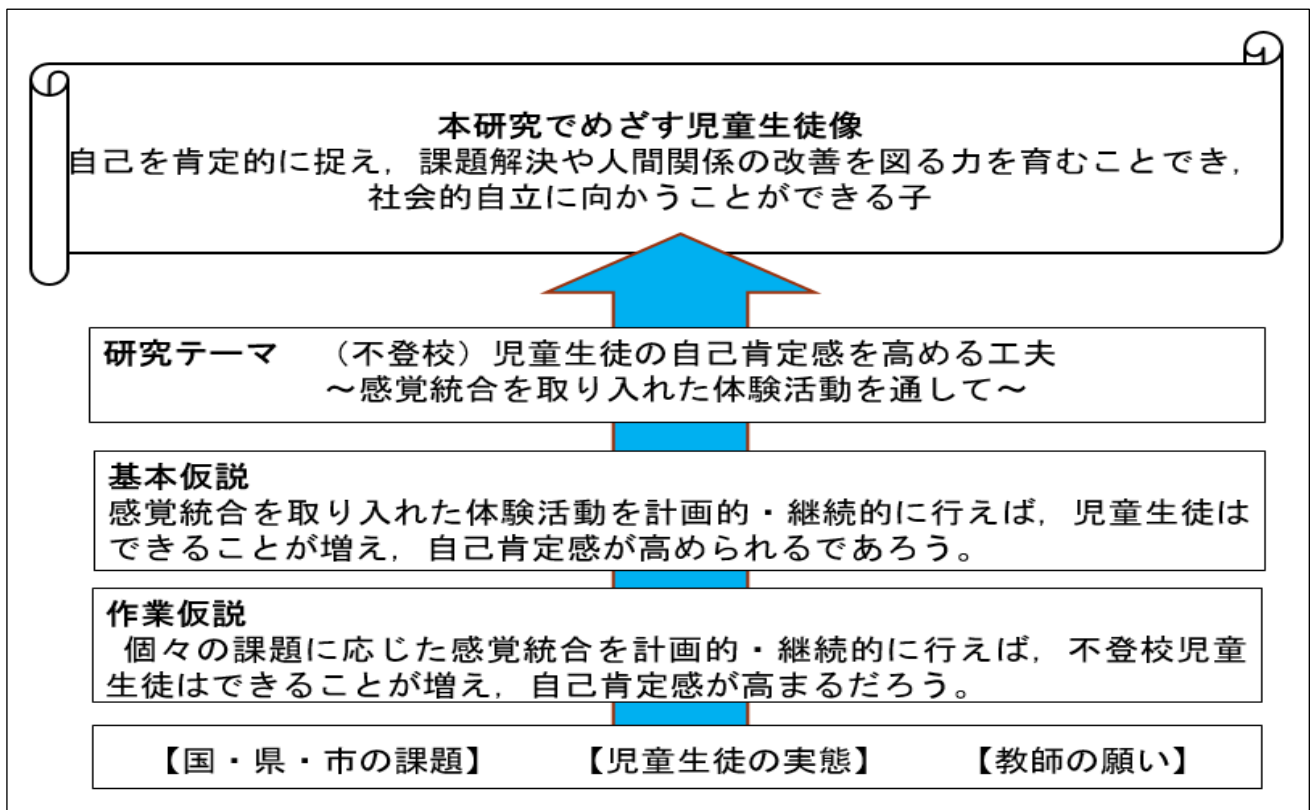
1 基本仮説

感覚統合を取り入れた体験活動を計画的・継続的に行えば，児童生徒はできることが増え，自己肯定感が高められるであろう。

2 作業仮説

個々の課題に応じた感覚統合を計画的・継続的に行えば，不登校児童生徒はできることが増え，自己肯定感が高まるだろう。

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究内容

1 自己肯定感について

(1) 自己肯定感とは

教育再生実行会議第十次提言によると自己肯定感とは2つの側面から捉えられている。一つは，自らの努力で得られる達成感や他者からの評価から，もう一つは，自分の長所や短所も含めた自分らしさや個性を受け止めることで身に付けられる自己肯定感である。この提言を受けて表1のように竹内（2017）は述べている。

(2) 自己肯定感の傾向を把握するために

自己肯定感の傾向を知る方法として，東京都教職員センターが作成した自尊感情測定尺度(東京都版)自己評価シートがある。これによると「自尊感情や自己肯定感とは心理学用語の self-esteem（セルフエスティーム）を訳した言葉であり，『自尊感情』を自分のできることできないことなど，すべての要素を包括した意味での『自分』を，他者との関わり合いを通して，かけがえのない存在，価値ある存在と

表 1 2つの側面から捉えた自己肯定感

(竹内 健太 2017)

『他者評価などに基づく自己肯定感』	他者から肯定的な評価や反応を受けたり他者と比べて優れていると感じたりすることにより育まれる。	(例) 頑張って勉強した結果テストで1番を取れたとき。 ・努力して描いた絵が先生や友人に褒められたとき。
『自己受容に基づく自己肯定感』	いたらないところや自分を否定するのではなく、重要な個性として受け止め、受け入れることで得られる。	(例) 自分の短所も受け入れる ・頑張れないこと努力が続かないこと。 ・未熟なところ。

捉える気持ち。

『自己肯定感』を自分に対する評価を行う際に、自分のよさを肯定的に認める気持ち」と示している。(東京都教職員センター平成 22 年紀要)

自己肯定感の定義は諸説あるようだが、自尊感情の定義が、現在の教育再生実行会議第十次提言の「自分を否定するのではなく受け入れるようにすることや他者との関わり合いを通して価値ある存在と捉える気持ち」と類似していることから、本研究では同類と捉え、自尊感情測定尺度(東京都版)自己評価シートを児童生徒の自己肯定感の傾向を見るために使用する。

(3) 自尊感情測定尺度 (東京都版 平成 22 年)

自尊感情測定尺度(東京都版)自己評価シートは、児童生徒が自己評価を行い内面的傾向が把握できる。その傾向は3つの観点(ABC) Aは「自己評価・自己受容」で、自分のよさを実感し自分を肯定的に認めること。Bは「関係の中での自己」で、人との関わりを通して自分が周りの人に役に立っていることや周りの人に気づくこと。Cは「自己主張・自己決定」で今の自分を受け止め自分の可能性について気づくことである。

結果は3つの観点(ABC)が成す三角形の形で表され、三角形の大きさがバランスよく大きい場合は自己肯定感が高く、バランスは取れていても小さい場合は自己肯定感が低いことを示す。また、3観点の大小で作られる三角形の形からそれぞれの傾向が分かる。本研究では以下自己評価シートと表記する。

2 感覚統合(感覚統合理論)について

米国の作業療法士である A.J. エアーズ博士が、研究と臨床から考案したのが『感覚統合理論』である。子どもの学習が遅かったり、好ましくない行動をしたりするのは脳内の感覚統合がうまくいっていないことが原因のことがよくあり、感覚統合の問題は見た目ではわからないが子どもが感じる困り感に影響を及ぼしている。

感覚統合は、単純に障害を軽減することを目指すのではなく、毎日の生活の中でよりよく機能できるよう支援していく事に主眼が置かれている。また、遊びは感覚統合を生じさせる一連の適応反応でもあるという。『楽しい』は子どもが感覚統合を表現している言葉である。動いたり、話したり、遊んだりするときに生じる感覚統合は、読み書きや好ましい行動のための土台である。(A.J. エアーズ 改訂 2020)

(1) 感覚統合で大切な3つの感覚と他感覚との関連

人の感覚には、普段自分で意識して使っている五感と意識しない感覚がある。五感の一つである視覚の統合がうまくいかないと「蛍光灯の明かりがちらちらして見えたり、目の前の障害物に気づかなかったり、自分が空間のどこにいるか分からなかったり、方向感覚も分からないだけでなく、本の文字に注意を払うことや次の行へ目をスムーズに動かすことも苦手になる。視覚からくる困難さの場合、目と手の動きがうまく統合されていないことも多い。

聴覚の統合がうまくいかないと聴力は十分でも、聞こえた音进行处理するのが遅れたり自分が言いたいことを思い出すことにも時間がかかったり、何気ない普通の音にも驚いたりして苦痛や不安をかえる。(キャロル・ストック 2020)「聞こえてくる音は何なのか、どこから来るのか、安全なのかを本来なら瞬時に聞いて逃げるなり、体を他のほうへ向けたりするこの動きは無意識に前庭覚を働かせている。

視覚や聴覚のように意識して働かせる感覚と前庭覚のように無意識に動きやバランスを取る感覚を一緒に働かせて人は身を守っている。

人は無意識の感覚を働かせて人との距離を把握したり、コップに水を注いだり、紙パックの飲み物をストローからこぼさずに口の位置まで運ぶことができる。これらの感覚は「前庭覚」以外にも「固有覚」「触覚」があり感覚統合で大切となる。

表2には、これらの感覚が上手く働かないと身のこなしがぎこちなくなったり、同時にいくつかの動きが出来なかったり、手先が不器用になり集団の活動や学校生活に困り感をきたすことがあることを表している。

表2 感覚統合で大切な3つの感覚

	『前庭覚』	『固有覚』	『触覚』
どんな感覚	バランス感覚とも言う。自分の位置情報で「上」を把握して直立状態が保てる。動きに応じて体のバランスや、回転やスピードを感じ取る。体の動きに伴って視野がずれないように眼球を動かす。筋肉の張り具合、姿勢のコントロールと関連している。	自分の動きや体の位置を感じる感覚「体の中にある目のようなもの」で運動機能制御をする。力のいれ加減や力を入れる方向などを感じ取って体の各部分をスムーズに動かす、姿勢を保っておく等に関連している。	皮膚全体のセンサーのような感覚で触ったり触れたりするときを感じる。物の質感や形、重さを感じ触ることで何かを弁別したり、危険を知ったりする感覚。 手の器用さ、情緒の発達などに関連している。
うまく感覚が働かない場合	スムーズに動いたり、バランスをとることが出来ない、動きが大きすぎたり、小さすぎたりする。 筋肉の張り具合の低下のため、ぐにゃつとした体つきになり、姿勢よく座ったり、立ったりしていられず重力に逆らうので疲れやすい。	全身を使った大きな動き、手先を使った細かい動きで使う各筋肉の調節ができない。物を操作することが苦手。力の加減が調節できず力強く扱いすぎたり、壊したりする。 スムーズに歩く走る、座る、立つがぎこちない、体の安定感がない。	強い刺激を求めて、触って確かめることをする。爪や鉛筆をかむ。 刺激を避けたり刺激に敏感なので、なでられる、帽子、マスク、靴下をはくの嫌がる。 人との距離がつかめず、近づきすぎる。

<p>こんな時に感じる</p>	<p>滑り台から滑り降りたり、ブランコで揺れたりするときに感じる。</p> <p>回転する。</p> <p>片足を上げたままで靴下をはく。</p> <p>でこぼこの道を転ばないで歩く。</p> <p>景色を見ながら歩く。</p>	<p>重力に逆らう動きや力を入れて体を動かす綱引き、トランポリン飛び、ジャングルジム、トンネル遊び、重たい物を持ち上げることで感じる。</p> <p>目を閉じたままで手でグー、チョキ、パーを出す、手元を見ないで持つ。紙パックの飲み物をこぼさずに持つ。</p>	<p>物を触ってその特徴を知る時に感じる。紙をバインダーに挟む時の紙とバインダーの触感。</p> <p>ボタンの留め外し。</p> <p>ゴムで止める（引っ張る、ゆるい、きつい）</p>
<p>学校生活の困難さ</p>	<p>ジャンプ、前回りが苦手。</p> <p>目を左から右へ動かす動作で本を読むなどが苦手。</p> <p>顔を上げ下げして自分のノートと黒板を見る。</p>	<p>手元を見ないで着替えたり帽子をかぶる、リコーダーを吹く、ドアノブを回す。</p> <p>力の加減ができず鉛筆の芯を折ってしまう、フォークやお箸を刺すのに苦戦する、水の入ったバケツをこぼさず持てない。</p> <p>大勢の中を歩けない。</p>	<p>どろ、のりベタベタしたものが苦手。</p> <p>粘土、絵の具、荒々しい木の皮を触り過ぎる。</p> <p>刺激を避けたり刺激に鈍感、けがの痛み不感、空腹に気づかない。</p>

キャロル・ストック・クラノウィッツ（2020）、川上康則（2015）

(2) 感覚統合の問題の分類

表3は感覚統合に苦手さがある子どもたちの特徴についてまとめたものである。環境での不適応を起こし、教室にいるのが苦痛であったり、学習について行けなかったり、体育や集団が苦手であったりするのは、感覚統合が不十分の場合がある。感覚統合の問題を分類し子どもたちが抱える苦手さを軽減するため刺激する感覚と関連させた。

表3 感覚統合に苦手さがある子どもの特徴 ●具体例

前庭覚	固有覚	触覚	視覚・聴覚
<p>●ボールを投げたり、受け取ったりしにくい</p> <p>●階段の上り、降りがぎこちない 【頭の位置と体の位置を同時に処理することが苦手】</p> <p>●走り回ったり、高い所からのジャンプを繰り返す、ブランコ遊びに執着 【感覚刺激を求める子】</p> <p>●身のこなしが不器用なことから机やドア、階段、鉄棒などにぶつかる 【物によくぶつかる子ども】</p>	<p>【同時に処理するのが苦手】</p> <p>●コップに注ぐ水の重さが判断できず、こぼしてしまう</p> <p>●文字を書くため適切な力で鉛筆が握れず、芯をよく折る</p>	<p>●ベタベタしたものが嫌</p> <p>●洗顔やシャワーを嫌がる 【触覚過敏】</p> <p>●どろんこ遊びや水遊びに没頭 【触覚刺激を求める子】</p>	<p>●集団やにぎやかな場所に行きたがらない 【聴覚過敏】 ※前庭覚と関連</p> <p>●色々な物が目にとまってしまう</p> <p>●見た物の形や模様等が詳細に記憶し過ぎる 【視覚過敏】 ※前庭覚、固有覚と関連</p>

<ul style="list-style-type: none"> ●体の筋肉が柔らかかかったり、バランス機能が未熟で同じ姿勢を保てない 【姿勢を保つことが苦手な子ども】 	<ul style="list-style-type: none"> ●触っている物の感触がわかりにくい 【感覚が区別しにくい子ども】 ●紙コップのようなやわらかい容器を持つときの力加減が難しい
	<ul style="list-style-type: none"> ●自分の体のどこを触られているかわかりにくい 【感覚が区別しにくい子ども】
	<ul style="list-style-type: none"> ●左右の手が同時に違う動きができない ●靴紐が結べない 【複雑な動きができない】
<ul style="list-style-type: none"> ●なわとびのように左右の手を同時に回し、連続でジャンプするなどのいくつかの動作を組み合わせて行うことが苦手 ●紙を手で持ち、もう片方の手ではさみを持ちきる動作が苦手 【複雑な動きができない】 	
<ul style="list-style-type: none"> ●足下を見てしまい体が前屈みになるのは自分の体の位置が分からない、重心が前に出てしまいストップできない ●体をまっすぐに意識してリズムに合わせて歩いたり両足ジャンプやケンパーをしながらラダーを跳ぶことができるのは高度な技で、普通に歩くのも手拍子に合わせてできるのも難易度が高い 【複雑な動きができない】 	

イラスト版発達障害児の楽しくできる感覚統合 太田篤志著 合同出版 2012
 でこぼこした発達の子どもたち キャロストック・クラウツ 金子書房 2020

VI 実践

1 週時程

感覚統合を計画的・継続的に行うために週時程（図1）に組み込んだ。月曜の体験活動はパズル、折り紙、ねんどや工作等。火曜のSSTの導入では、けん玉やお手玉等の昔あそびや足じゃんけん。風船バレー。水曜のスポーツ活動ではラダーを使ったジャンプやケンパーや歩行。木曜日には「感覚遊び」として感覚統合を遊び・ゲーム的に行い楽しみながらできる感覚統合を意識した。

	月	火	水	木	金
9:00~ 9:30	朝の会（出席点検・健康観察） ウォーミングアップ（ふれあいタイム）				金曜日は課内会議・はりゆん会議のため、午前中の支援なし。
9:30~ 11:30	体験活動	SST	スポーツ活動	体験活動	
11:40~ 12:00	さよならタイム (清掃活動・日誌の記入等)				
12:00~ 12:50	お弁当タイム				
13:00~ 14:50	学習(あけもどろ)	学習(ていんぼう)			学習(あけもどろ)

図1 あけもどろ学級の週時程 n = 4

表4 体験活動での具体的な感遊び（ は実践した主な感覚遊び） n = 4

前庭覚	固有覚	触覚	視覚・聴覚
紙飛行機	色合わせゲーム	花植※軍手使用	聖徳太子ゲーム
片足バランス	折り染め	ブラックボックス	色合わせゲーム
足じゃんけん	足じゃんけん	折り染め	チェーリングつなぎ
ラダーでジャンプケンパー	カップでバランスゲーム	紙飛行機	折り染め
ロープの上を歩こう	ピンポン球をキャッチ	カップでバランスゲーム	ピンポン球をキャッチ
風船バレー	ラダーでジャンプケンパー	お手玉	ラダーでジャンプケンパー
けん玉	ロープの上を歩こう	風船バレー	ロープの上を歩こう
お手玉	風船バレー	パズル	風船バレー
ぬりえ	お手玉	折り紙	お手玉
	けん玉	ぬりえ	けん玉
	折り紙	ねんどや工作	パズル
	ねんどや工作		折り紙
			ぬりえ
			ねんどや工作

表4に体験活動に取り入れる遊びを示している。例えば、前庭覚の項目の1番目にある紙飛行機は、飛ばす時に前庭覚の刺激を意図している。前庭覚は体をまっすぐに保つことや、頭と体のバランスを取る動作で刺激され、飛ばす時の指や腕の力加減で固有覚との感覚統合が生ずる。紙飛行機を生徒らは遠くへ飛ばすために、自然とそのような動きを取る。感覚遊びの意図は、楽しみながら感覚統合ができるようにすることや、個々の感覚統合の不十分さを改善できるようにすることである。網掛けで示した遊びは効果を期待した遊びである。

2 実態把握

生徒一人一人が持つ感覚統合の実態を把握するために行った行動観からは、様々な動きをすることで個々の課題が見えてきた。個々の感覚の課題を表5に示している。

表5 行動観察による一人一人の課題と実態

学年	感覚の課題	●実態
中学1年生W	【感覚が区別しにくい】 【複雑な動きができない】 ※触覚固有覚関連	●片足バランスで体を保持できるのは1秒足らずであった。 ●ラダーを使ったジャンプは、前屈み気味。 ●右手の指でビニールポットから苗を押し出して左の掌で受け取り、プランターに植える動作は手間取った。 ●紙コップをそっと持って重ねる動作は力加減の調整に時間がかかった。 ●直線に沿って切るハサミの進み具合は、1秒毎に動くようにゆっくり操作していた。
中学2年生X	【視覚過敏】 【聴覚過敏】 ※前庭覚関連	●一瞬で見て何かを当てるゲームで、1回目で当てることがある。 ●あけもどろ教室にいる時に入り口から入ってくる人のカバンに付いているキーホルダーの音で誰なのかが分かる。 ●ラダーの歩行やジャンプはリズムカルにできるが、1個飛ばし障害物を間に置くと、つまずいたり大きく前かがみになり動きがぎこちなくなる。
中学3年生Y	【聴覚過敏】 ※前庭覚関連	●集団やにぎやかな場所に行きたがらない。「学校の教室はゲームセンターみたいに、いろんな音が聞こえて来る」と話していた。一度に聞こえて来る多くの音の中から必要な音を聞き分けるには、しんどさがある。 ●片足バランスは片足を高く上げずバランスを保っている。 ●ラダーでの歩き方は猫背で、教室で座る姿勢も猫背気味である。 ●色合わせゲームで言葉を聞き取る時に、うつむいて聞き取っている。
中学2年生Z	【前庭覚】	●猫背で姿勢を保つことが苦手 ●ラダーを使った歩行で足下を見てしまい体が前屈みになったり、重心が前に出てしまい途中ストップをかけた時に止まれなかった。

※前庭覚関連はバランスや姿勢の保持との関連が高い

(筆者作成)

※固有覚関連は見えない状態で物をイメージすることに関連

3 実際の感覚遊び

(1) 聖徳太子ゲーム

出題者3人がそれぞれ違う言葉(例)りんご、バナナ、みかん、を同時に発する。それを聞き取る遊びである。聴覚過敏を対象にして、いくつかの音の中から必要な音だけを聞き取る。聞き取る時に集中を促すことになる。

(2) 色合わせゲーム

4色ペンを用意し出題者が言った色のペンを上げるゲーム。聴覚過敏を対象に出題者が言う色を聞き、瞬時にペンを持ち上げるので、このゲームは固有覚の刺激にもなる。

(3) ラダーを使ったジャンプ・ケンパー

体を真っすぐに意識してリズムに合わせて両足ジャンプやケンパーをしながら体を

移動させる。ラダーを見ながら体を移動させるので、視覚の感覚統合になる。初めは歩行や走で行い、次にジャンプしたりする。足下を見ていたのが遠くを見て移動するようになると自分の動きや体の位置を感じる固有覚や、直立状態で体のバランスをとることで前庭覚の統合にもなる。

(4) ブラックボックス

箱の中に物を入れてそれを触り、硬さや形、感触で物を当てるゲーム。触覚が刺激されるので感覚が区別しにくい子を対象とし、視覚を使わず触覚だけで物を当てるので、硬さや形、感触、素材を認知する経験が積み重ねられる。

VII 結果と考察

作業仮説の検証

個々の課題に応じた感覚統合を計画的・継続的に行えば、不登校児童生徒はできることが増え、自己肯定感が高まるだろう。

【結果】

個々の課題に応じた感覚遊びからは、生徒 W はブラックボックスで触覚の刺激を行った結果、折り紙で切り絵やつなぎ絵もできる程にハサミの扱いも器用にできるようになった。曲線も左手で持つ紙を回しながら切っている。円柱状の筒の下部を切るときも左手で筒を回しながら切っていた（図 2）。

図 3 は、ねんど工作の作品で、6 月は厚さ 2 c m の一つの塊に目や口をつけたものが、12 月は厚さ 5 m m まで薄く伸ばすことができ、表情をつけるために眉、ひげ、口の細まかい部分を棒状に伸ばしたねんどを指でつまんで細長くし、表面につけている。指先の細かい作業が 6 月よりできるようになっている。

生徒 X は聖徳太子ゲームでリンゴ、バナナ、みかん等の 3 文字言葉なら 1 ～ 2 回で聞き分けた。「聞き分ける時は自分の両方の耳を 1 8 0 度広げる感じで聞いている」と聞き分けるコツを話してくれた。2 回の聞き取りで完璧に 3 つの音を聞き分けた時は、「3 つの音を別々に聞き取る感じが楽しかった」という感想だった。

ねんど工作は好きで、細かい部分の表現も元々上手な生徒 X だが、12 月のねんど工作は作品に高さがあり、立てて置いている。立てるのは何度も置いて倒れないように試して仕上げている（図 4）。

生徒 Y は、色合わせゲームを 9 月にやった時はうつむいてペンを見て聞いていたが、2 月では耳を出題者の方



図 2 生徒 W の様子



図 3 生徒 W の作品
(下と左 12 月・右 6 月)



作品の高さは
3 c m で横長

図 4 7 月 生徒 X ねんど工作 12 月

に向け目はペンを見て瞬時に、その色のペンを上げることができた。背筋も伸ばし姿勢の保持もゲーム中、続いていた（図5）。

生徒Zは、ラダーを使つての動きで走り方が、かかとからの着地になり、歩幅も大きい。腕の振りも大きいので、スピードが出た。目線も前を向いている（図6）。

ブラックボックスでは、触覚だけで、物の硬さや形、ふたを回して外れることを確かめ、懐中電灯だとわかった。

図7の自己評価シートの結果からは、生徒WはB関係の中での自己とC自己主張の値が上がり、A自己受容は下がっている。

生徒Yの結果は三角形が大きくなり全体的にバランスが取れている。A自己受容、C自己主張は10月よりも値が大きくなった。自己肯定感が高まったと解釈する。

生徒WはBの関係の中での自己やCの自己主張は上がったが、Aの自己受容の値は下がった。生徒X・ZはCの自己主張が下がった。A自己受容とC・Bの値には、あまり変化は見られなかった。



9月 生徒Yの様子 2月

図5 色合わせゲーム

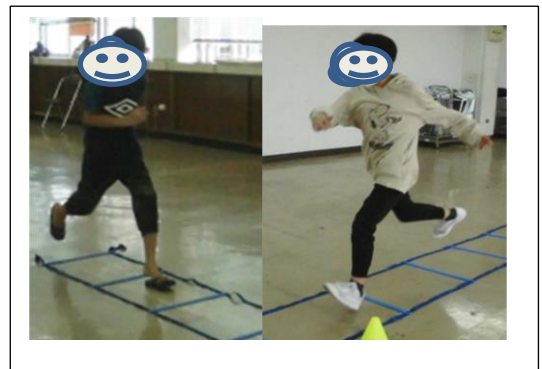


図6 生徒Zの様子（左9月・右1月）

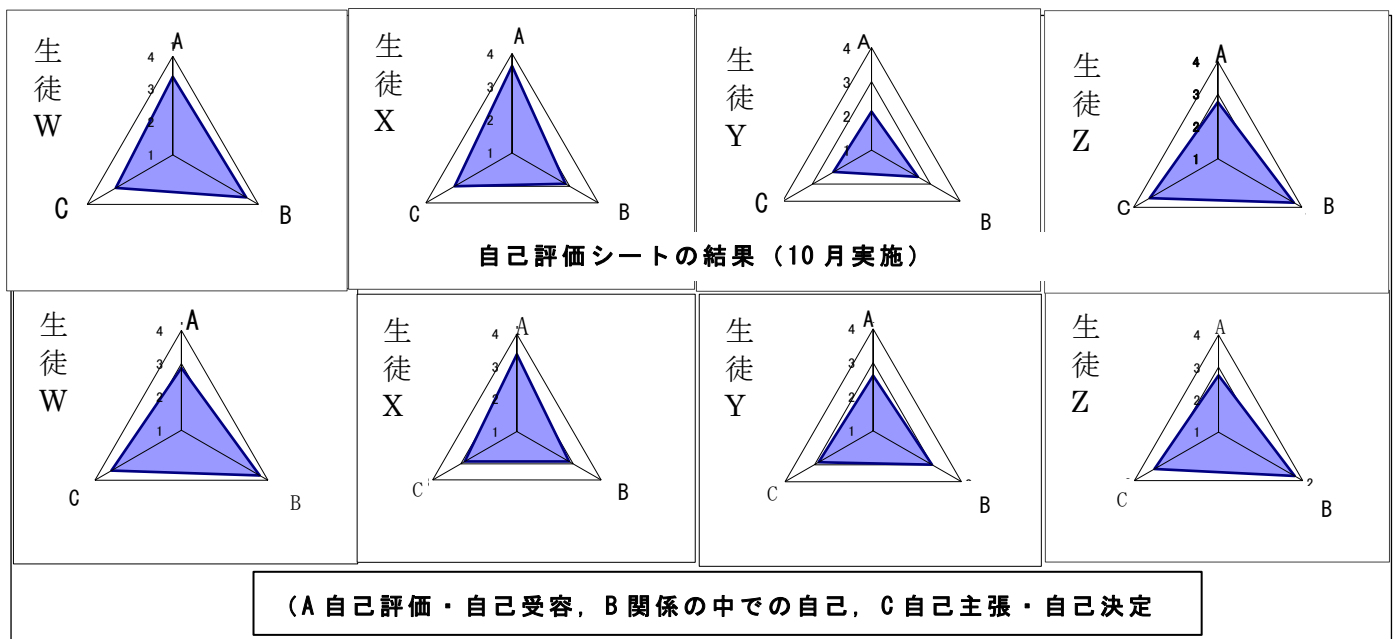


図7 自己評価シートの結果の比較（1月実施）

【考察】

生徒Wは、左右の手が同時に違う動きをする複雑な動きができるようになり、指先を使った細かい作業ができたことから、物の感覚がわかりやすくなったと考えられる。自己評価シートの結果からは、B関係の中での自己とC自己主張の値が上がったことから、以前は「自分の言ったことが相手にどう思われるか気になる。話すのが苦

手。」と言っていたが、今は人前での発表や発話も増えた。あけもどろの仲間との関わりを通して自分が役に立っていることを実感し、手伝うことも多くなった。「ボール蹴るの苦手なんですよ」と自分の苦手な部分を口に出すようになったことから、仲間との関係の中で自己主張しながらも自分の至らない部分を見つめ始めたと考える。

生徒 X は、ブラックボックスでは、触覚の刺激に関連して固有覚との感覚統合が促され、ねんど工作で高さのある作品を倒れないように立てたりする時に、力の加減が上手くできるようになったと考える。自己評価シートの自己受容が下がった結果から、仲の良い友人ができたが、人を意識することで人と自分を比較し始めたと考える。

生徒 Y は、にぎやかな場所が苦手だったが、あけもどろ教室での活動中の音は気にならない時が増えた。集団の遊びで盛り上がる甲高い声は今もビクッとすることがある。耳栓を使い始めたことは、聴覚過敏で音が聞こえ過ぎる自分の特性を、受け入れた自己受容の行動に繋がっている。これらの行動や自己評価シートの自己受容の向上からも、自己肯定感が高まったと考える。

生徒 Z は、ラダーを使った走りやブラックボックスで、前庭覚や固有覚の統合がされたと考える。節分で退治したい自分の中の鬼に「人に譲って後で後悔すること」と記述しており、自己評価シートの自己主張の値が下がったのは、人との関わりが広がったことや、相手とのやり取りの中で自分を意識し始めたと考える。

まとめとして、感覚統合を取り入れた体験活動に継続して参加することで感覚を使ったり、感じたりすることは、生徒らの体の中でバランス感覚、体のイメージ、集中力、複雑な動きなどがスムーズになり、できることが増え自己肯定感が高まったと考察する。

VIII 成果と課題

1 成果

- (1) 個々の課題に応じた感覚統合を継続して行うことで個人差はあるが、児童生徒は楽しみながら、できるようになることが増え自己肯定感が高まった。
- (2) 感覚統合を取り入れた活動を計画・継続すると感覚の課題が複数も改善できた。
- (3) 感覚統合を学校生活の中でも意識して行うことで、児童生徒の感覚の課題が改善でき、自己肯定感が高められる見通しが持てた。

2 課題

- (1) 自己受容の部分の「至らないところや努力を認める事、できるようになったこと」に気づかせるためには、他者からの声かけも必要。
- (2) 感覚には個人差があるので感覚の課題把握は相談担当とアセスメントを見直す。
- (3) 感覚統合を学校生活で行う時の子ども達に意識させる言葉かけや計画の立て方。

《主な参考文献》

- 『でこぼこした発達の子どもたち 感覚統合の問題と上手につきあっていくために』キャロル・ストック・クラノウイツ著 土田玲子監訳/高松綾子訳 2020 金子書房
- 『イラスト版発達障害児の楽しくできる感覚統合』太田篤志 2012 合同出版
- 『感覚統合の発達と支援 子どもの隠れたつまづきを理解する』A・ジェーン・エアーズ著 岩永竜一郎監訳 古賀祥子訳 2020 金子書房
- 『自尊感情や自己肯定感に関する研究（第3年次）』東京都教職員研修センター紀要第10号